

独立行政法人国立病院機構 附属看護（助産）学校
令和7年度 入学者選抜試験問題

国 語

実施日時：令和7年1月23日（木） 9：00～9：50

*下記の〈注意事項〉をよく読み、監督者の指示を待ちなさい。

〈注意事項〉

— 開始前 —

1. 監督者の〈開始〉の指示があるまで、この問題冊子の中を開けない。
2. 解答用紙には、解答欄のほかに下記2つの記入欄がある。その説明と解答用紙の「注意事項」を読み、2項目の全てに記入またはマークする。
 - ・受験番号欄 上欄に受験番号を左詰めで記入し、下欄にマークする。
 - ・氏名欄 氏名・フリガナを記入する。
3. 解答用紙に汚れがある場合には、挙手で監督者に知らせる。
4. この表紙の受験番号欄に受験番号を左詰めで記入する。

— 開始後 —

1. 問題は2ページから21ページまでの各ページに印刷されており、第1問～第2問の2題で構成されている。
開始後確認してページの落丁、乱丁、印刷不鮮明等がある場合は、挙手で監督者に知らせる。
2. 解答は全て解答用紙の所定の欄へのマークによって行う。たとえば、

1

と表示のある問いに対して2と解答する場合は、次の〈例〉のように解答番号1の解答欄②をマークする。

〈例〉

	解 答 欄				
	1	2	3	4	5
1	①	●	③	④	⑤

3. マークする際はHBの鉛筆でマーク欄を適切にマークすること。
4. 質問等がある場合は、挙手で監督者に知らせる。
5. 試験開始後の途中退室はできない。

受験番号					

※左詰めで記入する

(問題は次のページから始まる)

第1問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(配点50点)

「日本人は普通のひとがえらい」。日本社会について海外のひとからそのように言われることがある。一つの見識かもしれないが、そしてそのように言える面が戦後の一時期までの日本社会にはきつとあったようにもおもわれもするが、現在の日本社会は、独特のバランス感覚をまだ失っていないとはいえず、「普通のひとがえらい」とはとてもいえない状況にある。

「普通のひと」とは「市井のひとびと」と言いかえてもよい。ところがその「市井」というもののそのものが大きくひび割れてきたのが、近年の日本社会である。そしていま、「無縁社会」や「孤独死」が問題とされ、「地域社会」や「コミュニティ」の崩壊とその再生が口を泡をためて叫ばれる一方で、わたしたちはかつての職住一致を基盤とした、顔見知りだけで構成される「町内」のような地域社会の再生はもはや不可能であるとも感じている。《1》このようなジレンマのなかで、わたしたちはいまいちど、そもそも現代における「地域」や「コミュニティ」とはどのようなものなのか、「住民」と「市民」はどう違うのか、「自立」と「相互支援」はどのような関係にあるのか、「共同」と「協働」の違いはどこにあるのか、などといった基本的な問題を押さえておく必要があるだろう。《新しい公共》という問題をきちんと議論することも、そうした基本的問題についての議論の積み重ねの延長線上にしか(ア)テンボウできないのではないだろうか。

社会の「近代化」とともに、ひとびとはそれまで家族や地域社会で担っていた相互のいのちの世話を社会全体でおこなうようになった。出産や死亡、看病や看護は病院の医療スタッフが担うようになった。子どもの教育は学校のプロの教師に委託されるようになった。食材の調達や調理は流通産業やレストランが引き受けることになった。排泄物も農家の手を借りることなく自治体が敷設した下水道で処理する。地域のもめごとの最終的な解決は、区役所や弁護士にまかせる……。代わりにわたしたちは自治体に税金を納める。企業にサービス料を支払う。ひとびとの相互の世話は、このようにして自治体もしくは業者と住民とのサービスの(甲)となる。そう、サービスの提供者とサービスの消費者に。

いまあらためて顧みて、ひとびとが生き^{ながら}存えるためにどうしてもしなければならぬこと、(a) 出産の助け、食材の調達、排泄物の処理、病や傷の手当て、看護や介護、看取りや清拭や埋葬といったひとびとをひとびとはどれだけじぶんたちの手でできるだろうか。ほぼすべてできないし、したこともないのではないか。生き存えるためにひとびとがどうしてもしなければならぬこと、けっして免除されることのないこと、つまりは《いのちの世話》の能力をわたしたちはほぼすべて失っている。それは地域社会のだけれどがやってくれるからではなく、わたしたちが税金やサービス料を払って、これらをごとく行政サービスやサービス・ビジネスに委託してきたからだ。生き存えるために欠くことができない仕事を、じぶんではしなくなった、おたがいにやりあわなくなった。

「村八分」という言葉がある。かつて村の掟や約束を破った者、秩序を乱した者に対してなされた制裁行為のことである。村での生活にはたがいに協力することが義務づけられた十の仕事がある。出産の手助け、看病、改築・葺き替えの手伝い、消火、水害時の助けあい、成人式・結婚式の手伝

い、埋葬と追善法要の手伝い、旅行の世話である。「村八分」という制裁は、このうち消火と埋葬を除く八分を断つことを意味した（「八分」は「はぶく・はじく」の意味だという異説もある）。二分の一つ、消火の手伝いは、村人の家への延焼を防ぐためである。いま一つの埋葬の手伝いは、死体を放置すると腐乱し、① デンセン 病の原因となるからである。翻って考えてみるに、この二分にかぎらず村十分のいっただれだけを、今日わたしたちはしているだろうか、できるだろうか。たぶんゼロであろう。出産、看病は医師にまかせ、消火や災害時の助けあいは消防署員や自衛隊員にまかせ、成人式、結婚式、旅行、葬儀は業者にまかせている。《2》

事の経緯をいいますこし詳しく見ておこう。わたしたちには、生きるうえでどうしても削除できないとなみが少なからずある。出産、つまり種の再生産がそうだし、日々の食（食材の調達と調理）と排泄（糞便の処理）、つまり個の再生産がそうだ。生まれた子どもを養育し、教育すること、これも省きようのないことだ。病気になるたときに治療し看病すること、高齢者を介護し、^{しょうがい} 障碍のあるひとたちを介助すること、ともに生き存えてゆくうえで外せないことだ。そして看取り、見送り。これら生老病死にじかにかかわることだけではない。防災に防犯。そして住民たちのあいだのもめ事の解決、これらもまた、共同生活のなかでどうしても削除できないとなみだ。これらすべてを、わたしたちは長らく家族ならびに近隣のひとたちとともに、相互ケアというかたちで担ってきた。出産も近所に助産婦さんがいて、自宅で家族が手伝って出産していたし、食材の調達も地産地消でやってきた。排泄物処理は農家と連携して、治療もたいていはそれなりの応急処置の術を体得し、煎じ薬を吞ませたり、体のツボを押したりして、とりあえずしのぐ知恵をもっていた。看取りも遺体の清拭も、葬儀ももめ事解決も、防火対策（防火用水、「火の用心」）も交替で任に付いた。

（b）、明治期よりこの国が「近代化」されてゆく過程で、西洋列強に一気に追いつくために国力の増強が最大の課題とされ、議会の設置やさまざまな行政機関の制度化や、「富国強兵」「殖産興業」とならんで、国民の知力、体力の向上という課題を国家が一身に担うことになった。生活の質を上げるために、X。出産、治療、看護、死亡認定については、病院を建設し、医療関係の専門学校で教育を受け、国家資格を取得した医師、看護師、放射線技師というプロフェッショナルに一括してあたらせることにした。排泄物処理については、地方自治体が下水道を設置して処理することで衛生度を高めることにした。教育に関しては、師範学校において教師を国家免許をもったプロとして養成した。都市の安全であれば消防士や警察官の養成。もめ事解決には公正な調停、② チュウサイ にあたる法曹のプロを養成する、などなど。

このように社会の近代化は、《いのちの世話》のプロフェッショナルを国家が養成し、国民はその専門職たちにじぶんたちがやってきた《いのちの世話》を委託する代わりに税金やサービス料を支払うという仕組みを築いていった。このことによって、不治の病は減り、世界でも最速で長寿化をなしとげた。まちは衛生的になり、治安もよくなって、夜一人で歩いていても危険を感じないでいられるくらい安全になった。調停もより公正なものになっていった。じつさい鉄道の運行はきわめて正確だし、郵便の遅配も停電もめったにない国になった。安心、安全、衛生、快適、便利なまち、つまりクオリティとアメニティの高い都市生活ができ上がっていった。

こういう仕組みが完備してゆくことで、市民生活において逆にクオリティを大きく損なったものがある。《3》いまこの国で、赤ちゃんを取り上げる腕前をもつひとは専門職を除きほぼゼロである。遺体の清拭や死化粧をするひと、できるひとほぼゼロである。調理において魚を捌けるひと、家人の病や傷の応急手当てができるひとと格段に減った。子どもの具合が悪ければ、応急の処置を施さずにまっさきに病院へ連れてゆくことになった。ましてや災害時の排泄物の処理方法、雨水を飲料水に変える方法を知っているひとはほとんどいない。災害で食材の流通が止まったときも、じぶんたちで工夫して野山の植物を調理するのではなく、配給を待つだけだ。

以前、瀬戸内寂聴さんと講演会場の楽屋でお話ししているとき、ふと、むかしの庶民の家にあっていまはないものに話が及んだ。で、とつきに浮かんだのが、わたしは救急箱、お相手は大工箱、この二つだった。わたしが子どもの頃は、どの家にも厚紙で作った引き出し付きの救急箱が押し入れにあって、富山の商人から買い受けた薬がぎゅうぎゅう詰めに入っていた。半年後か一年後にはおなじ行商人がまた、補充にやってきた。傷、肩こり、発熱、風邪、頭痛、歯痛、腰痛、腹痛、下痢、水虫……なんでもござれの箱だった。「陀羅尼助」^{だらにすけ}とか「今治水」^{こんじすい}、「赤チン」、「ヨーチン」の香りの記憶は、どぶの臭いのそれとともに、いまも体の奥底に淀んでいる。現在はだろう。解熱剤や、頭痛、肩こり、生理痛用の常備薬は台所の引き出しに入っているが、「病氣」と名のつきそうなものは、家でまずは手当てを、とはだれも考えず、すぐに医院に駆け込むなり、タクシーを呼んで病院に走る。

大工箱には、鋸^{のこぎり}や鉋^{かな}、錐^{きり}や鑿^{ののみ}や小刀が一揃い入っていた。薬が効能の見えないちよつと怖いものであったのに対して、大工道具は見た目には物騒だが、これを使いこなせないと大人になれないといった、ちよつとまぶしいものであった。砥石で研いだり、紙やすり（大人は「ペーパー」と呼んでいた）で磨いたりして道具を手入れすることが、一人前になる条件のように子ども心におもわれた。（c）、チャンバラ用の刀とか、水遊びをするときの模型の船とかを、鋸や鉋を使って作ったものだった。そのなかで物への道具の当て方を体で憶えていった。（当時、女の子はどんな工作をしていたのか、していなかったのか、これについてはほとんど記憶がない。）そのような工作を子どもがしている姿を、いまはもう見かけることはない。

ちよつと大げさな言い方になってしまいそうだが、A身体環境を整えるという課題が、その頃はまだひとびとの手の内にあった。料理はもちろん、服を作ることも（婦人雑誌にはかならずドレスメーカーキング用に布の（E）サイタン図が載っていた）、家を修理することも、子どものしつけや教育、病気の手当ても、ゴミや排泄物の処理も、近所での諍^{いさか}いを収めることも、みなじぶんたちの手でした。そして、まるでその総仕上げかシミュレーションのようなものとして、地域の行事や祭事があった。そして子どもたちにも、いずれそれを担ってもらわねばならないという理由で、幼いうちから年齢に応じてそれなりの役をあてがった。《4》

高度成長期から高度消費社会への移行のなかで、それら日常生活でかならずこなさなければならぬことが、行政の公共サービスや企業によるサービス業務にとって代わられるようになった。みずから体で憶え、果たすのではなく、サービスを選ぶのがわたしたちのいとなみとなった。金はかか

るが「楽になった」のである。そしてちょうどそのぶん、わたしたちは無能力になっていった。世代から世代へ、『いのちの世話』の知恵とわざを伝える義務を免除されてきたその代価として、わたしたちは『いのちの世話』をみずからの手でおこなう能力を失った。「大人」と「子ども」の区別がつかなくなったのである。

では、トラブルが起こったとき、サービスが劣化したときに^Bわたしたちにできることは何か。皮肉にも行政やサービス企業の担当者にクレームをつけることだけなのである。税金はちゃんと納めている、サービス料はきちんと支払っている、わたしたちの側に落ち度はない、だからサービスが停止したり劣化したりすればそれはサービスを提供する側の責任だ、というわけである。《5》クレマーは特別なひとたちではなく、わたしたちは（乙）にみなクレマーでしかいられないのである。クレマーは口汚くののしるが、それは見た目とは違い、まったく受け身の要求をしている。サービス・システムに対して、「われわれがもっと安心してぶら下がっていられるようにしてくれないと困る」と文句をつけるだけなのだから。成熟した市民であれば、ここでクレームをつけると同時に、「そんなやり方ではだめだ。たとえばこういうやり方もあるはずだ」というふうに対案を示す。そのやり方にあきれ果てたら、「もうあなたたちにはまかせられない。少々リスクはあってもこれからはじぶんたちで、地域でやるから、そのぶんの^オフタン金は引き上げる」というふうに、サービス業務そのものをじぶんたちの手に引き戻す。

じぶんたちが生き延びるために絶対に削除できない『いのちの世話』を、行政や企業に全面的に譲り渡さないこと。この気概と仕組みをわたしたちは長らく放棄したままであった。そのことのつけがこうした市民生活の未熟さ、ないしは劣化をもたらした。わたしたちはいのちをシステムにあずけすぎてきたのである。

（出典 鷲田清一著『しんがりの思想 反リーダーシップ論』KADOKAWA）

問一 傍線部(ア)～(オ)のカタカナの部分に漢字に直す場合、最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は(ア)

1

、(イ)

2

、(ウ)

3

、(エ)

4

、(オ)

5

(配点 各2点)

(ア)	テンボウ	①	天	②	点	③	典	④	転	⑤	展
(イ)	デンセン	①	線	②	選	③	栓	④	染	⑤	専
(ウ)	チュウサイ	①	仲	②	忠	③	中	④	柱	⑤	抽
(エ)	サイタン	①	段	②	断	③	談	④	壇	⑤	団
(オ)	フタン	①	不	②	扶	③	普	④	負	⑤	訃

問二 本文中の(a)～(c)に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。解答番号は(a)

6

、(b)

7

、(c)

8

(配点 各2点)

- ① なぜなら ② だから ③ ところが ④ たとえば ⑤ また

問三 空欄（甲）（乙）に入るものとして最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は（甲）

9

（乙）

10

（配点 各4点）

（甲）

① 権力関係

② 授受関係

③ 依存関係

④ 上下関係

⑤ 因果関係

（乙）

① 後天的

② 挑戦的

③ 平均的

④ 潜在的

⑤ 計画的

問四 空欄

X

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

11

（配点 4点）

- ① 国家が国力の基礎である国民の《いのちの世話》をシステムティックに担うことをはじめたのである
- ② 国民は国家のトラディショナルな方法に国力の土台となる自分自身の《いのちの世話》を委ねたのである
- ③ 国家はドメスティックな課題として国民の《いのちの世話》は国民自身で担うことを推進したのである
- ④ 国家は国民同士が相互の力で《いのちの世話》ができるプロフェッショナルを養成することを考えたのである
- ⑤ 国家は国の要となる国民の《いのちの世話》を担うオートマチックな国家の仕組みを築くことにしたのである

問五 次の一文は、本文中の《1》《5》のどこに入れるのが最も適当か。次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

12

(配点 5点)

いうまでもなく、《いのちの世話》を自力でおこなう能力の喪失である。

- ① 《1》 ② 《2》 ③ 《3》 ④ 《4》 ⑤ 《5》

問六 傍線部A「身体環境を整える」という課題が、その頃はまだひとびとの手の内にあつた」とあるが、その内容として合致しないものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

13

(配点 5点)

- ① むかしの家には様々な薬が詰まっている救急箱があり、まずは家で病気や傷の手当てをすることを考えたが、現在では応急処置をすることなく、すぐに病院に行くようになったため、家庭内での基本的な医療スキルが失われつつある。
- ② むかしの庶民の家には大工箱があり、道具を砥石で研いだり、紙やすりで磨いたりして手入れをする経験をして、物への道具の使い方を体得していったが、現在では子どもたちがそのような作業をしている姿を見かけることがなくなった。
- ③ むかしは近隣でのめめ事を収めるなどはじぶんたちの手でおこない、地域の行事や祭事では未来の担い手として、小さい頃からある程度の役目を与えられたが、今は日常生活の責任が個人と行政から企業のサービスとして移るようになった。
- ④ むかしは食材の流通が停止したときは、じぶんたちで野草を調理するなどをしていたが、現代の災害時においては、食料の配給を待つことになり、雨水を飲料水に変える方法や排泄物の処理法を知っているひとはほとんどいなくなった。
- ⑤ むかしは自分たちで服を作るために婦人雑誌にドレスメーカー用図の図が載っていたように、料理、家の修理、ゴミの処理などは、じぶんたちの手でおこなっていたが、現代では行政や企業のサービス業務が代わりをするようになった。

(配点 6点)

- ① 《いのちの世話》の知恵とわがを伝達する義務からは外れたが、《いのちの世話》をじぶんたちでおこなう能力も同時に失ったわたしたちに、トラブルが起きたときにできることは、行政や企業の担当者にクレームをつけて責任転嫁をすることである。
- ② サービスが劣化した際に、じぶんたちの手で《いのちの世話》をする能力はなくなったが、税金や料金をきちんと支払ってサービスを選んでいくわたしたちができることは、ひどいクレームにならないように受け身の姿勢で要求をすることである。
- ③ サービスが劣化した場合、じぶんの手で《いのちの世話》をおこなう能力が無くなったわたしたちがやるべきことは、クレームをつける前に代わりの案を示し、企業や行政にゆだねていた《いのちの世話》のお金を払って個人の側に引き戻すことである。
- ④ トラブルが起きたとき、《いのちの世話》をじぶんの手でおこなう能力の喪失と、世代間で《いのちの世話》の知恵とわがを伝える必要がなくなつたわたしたちができることは、じぶんたちで安心なサービスを提供できない不満を行政や企業に訴えることである。
- ⑤ わたしたちは《いのちの世話》をじぶんでおこなう能力は失われたが、代わりにサービスを選べる立場になったため、サービスの劣化に対してできることは、サービスの質を高めるために市民が積極的な態度で行政や企業に文句をつけることである。

問八 本文の内容について説明した次のA～Eのうち、合致するものはいくつあるか。適切な数を、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

15

(配点 6点)

A 筆者は、現代の日本社会において、かつてのように「普通のひと」の重要性は失われつつあるが、「無縁社会」や「孤独死」といった問題を議論し、《新しい公共》を考えることで、「町内」のような地域社会の再生は可能であると述べている。

B 近代社会では、家族や地域での「相互支援」が強化され、出産の手助け、看病や介護、看取りや清拭や埋葬などは同じ地域社会に在るだけかやってくれるようになったため、《いのちの世話》の能力を養う必要性がなくなった。

C 「村八分」という言葉の語源は、村での掟や約束を破った者に対して、相互に協力することが義務であった十の仕事のうち八分を断つことからであるが、現代ではこの十の仕事でさえ、じぶんたちの手でおこなえる可能性は限りなく低い。

D 日本の近代化が進む中で、《いのちの世話》のプロフェッショナルを国家が養成し、国民は税金やサービス料を支払うことで《いのちの世話》を専門職に任せる仕組みをつくりあげたことで、利便性の高い都市生活が構築された。

E 筆者は、生存のために削ることのできない《いのちの世話》は行政や企業に全般的に受け渡さないという姿勢と仕組みを放棄して、いのちをシステムにあずけすぎたことが市民生活の未熟さや劣化の原因となったと主張している。

- ① 一つ ② 二つ ③ 三つ ④ 四つ ⑤ 五つ

第2問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(配点50点)

私たち人間は、まず第一に自分の命が大事です。これは別に恥ずべきことではありません。それは私たちが他の生物に比べると極めて大きなコストをかけて育てられてきたためです。それだけの価値が自分の命にはあります。自分が病気になって、生殖活動や子育てに支障がでることになってしまつては、子孫を残して増えることができなくなってしまいます。そんな問題を取り除くために最大限の努力をするようにできているのが私たち人間です。《1》

さらに私たちの悩みに⑦ハクシヤをかけるのが人間の持つ高い知能です。今は問題ではないけれど将来起こるかもしれない問題すらも、今悩んでしまいます。おそらくこのあえて悩む必要もない将来のことでも心配してしまう性質のおかげで、私たちは今まで生き残ることができてきたのです。もし、私たちが自分の健康に無頓着で、自分の命を顧みず、楽観的で将来のことを気にしない性質をしていたとしたら、簡単に絶滅していたでしょう。私たちが今まで生き残ることができているのは、祖先のほとんどが自分と子孫の命が大事で心配性だったおかげです。

ただ、このように自分が大事で心配性の性質は、生き残り、増え続けるために役に立ちましたが、楽しく生きるためには役に立ちません。むしろ、重荷になることも多いでしょう。

- a もちろん、人間はこうした本能に従つておいたほうが幸せを感じるようにできていますので、従つておけば楽ではありません。
- b そのような場合に気に留めておいていただきたいのは、これらの悩みは与えられたもので、私たちが自分で選んだものではないということです。
- c このような欲求をもった生物としていままで生きてきた結果として同じ欲求を私たちも引き継いでしまっているだけで、実のところ私たちがその欲求に従う義務も理由ありません。
- d 言つてしまえば、健康で長生きして子孫を残したいのは祖先からの刷り込みのようなものです。
- e 私たちが健康で長生きして子孫を残したいのは、私たちの祖先となった生物すべてがそうやってきたからです。

それでも、どうしても従わないといけない理由はありませんし、人間の高い知性をもってすれば、本能に逆らつたとしても幸せになることは可能だと思えます。この点はまたあとの章で考えてみたいと思います。

私たちが「なぜ死にたくないのか」を考えるとときに、もうひとつ考えないといけない問題があります。私たち人間のような大型の多細胞生物の体には、2種類の命があり、それぞれ別の死があるということです。

1つ目は、普通感覚としての命で、「個体」としての命です。これは胎児として体が形成されたあたりで生まれて、歳をとって死ぬときに失われるものです。こちらには寿命があり永続するものではありません。長くても100年くらいで必ず失われるものです。

もうひとつの命とは子孫へと受け継がれていく「生殖細胞」の命です。個体の命とは異なり、こちらには寿命がありません。事故や病気がなく、生殖に成功する限り続いていく命です。たとえ私という個体が死んだとしても、もし子どもを残していたとしたら、

X

生殖細胞とは生殖器にある特別な細胞です。この細胞が分裂して、女性であれば「卵子」、男性であれば「精子」と呼ばれる細胞を生み出します。新しい個体が生まれるときには、この卵子と精子が①ユウゴウして「受精卵」と呼ばれる1つの細胞となります。この受精卵が細胞分裂をすることで筋肉や骨、臓器などの細胞へと分化し、新しい多細胞個体を形成していきます。《2》

この細胞分裂のかなり初期の過程で、受精卵から再び生殖細胞が生まれます。この生殖細胞はその後、個体が生殖可能な年齢になるまで生殖器のなかで大事に保管されます。個体が生殖可能な年齢になると、細胞分裂を始め、卵子や精子を作り出し、次世代の個体を作ることになります。つまり、生殖細胞は個体が死んでしまった後も、子どもの体の中で生き続けることができます。私たちがもつ生殖細胞もまたそのようにして過去からずっと生き残ってきた細胞です。その意味で生殖細胞には寿命がなく、生殖が成功する限り生き残っていくことができます。

この2つの命が私たちの体の中には同居しています。生物としての本体はいつたいどっちなのでしょう。約70兆の体細胞からなり脳や手足をもつ私という多細胞個体でしょうか。それとも私の生殖器のなかにいる生殖細胞でしょうか。《3》

^A私は生殖細胞のほうが生物としての本体だと思います。なぜなら生物の根幹である「増えて遺伝する能力」は生殖細胞だけが持っているからです。生殖細胞は細胞分裂で増えますし、もともと持っていた性質は分裂後の細胞に遺伝します。細菌などの普通の単細胞生物と同じです。

一方で「私」という多細胞個体の方かというと、生殖細胞なしでは増えることができません。人間の体が2つに割れて、小さい2人の人間ができたりしません。人間（に限らずすべての多細胞生物）はかならず生殖細胞からできる受精卵から作られます。つまり個体を作るのは生殖細胞だけです。生殖細胞を作るのも生殖細胞です。個体を形成する体細胞から生殖細胞をつくることは、人間の場合は②ジンイ的な遺伝子操作なしではできません。つまり、生命誕生から増えて遺伝してきた生命を直接つないでいるのは生殖細胞であり、多細胞個体はその手助けをしているだけです。

《4》

多細胞個体とは、生殖細胞が増えるために生まれた乗り物のようなものだともみなすことができます。人間を含むほとんどの多細胞生物は増えるためにオスとメスが受精する必要があります。この受精のためには優れた異性を見つける必要があります。その異性を見つけるための乗り物が私たち多細胞個体です。生殖細胞は単細胞ですから、増えること以外はほぼ何もできません。動き回ることも捕食することもできません。その代わりに、多細胞個体が食べ物を探して食べたり、生殖細胞が受精する相手を探したりしています。つまり、すべての多細胞生物もその根っこ（生殖細胞）はずっと単細胞生物のままで、多細胞の個体を道具、あるいは召使いとして作って自分を増やす手伝いをさせているとみなすことができます。

これはたとえば菌類が「キノコ」をつくるのと同じです。キノコも酵母と同じように真菌類と呼ばれる真核生物で、要するにカビの一種です。キノコをつくるカビは、普段はキノコをつくりません。単細胞、(a)細胞がつながった菌糸という形で暮らしています。

たどるとき、キノコという、細胞からみれば巨大な建造物を作って生殖細胞である胞子を遠くまでまき散らします。キノコの構造はやはりカビの細胞からできていますが、キノコの構造を作る細胞は次世代に受け継がれることはありません。キノコの傘の部分にできる胞子になった細胞だけが次世代に受け継がれます。ここでキノコは胞子が遠くに飛んで次世代に受け継がれやすくなるための乗り物(この場合は踏み台の方が適切でしょうか)として使われています。私たち人間の個体もキノコのようなものです。《5》

多細胞個体は生殖細胞の乗り物として生殖細胞のために生きていると考え、第1章で紹介したハサミムシの自己犠牲も理解できます。ハサミムシの母親は子どもを産んでしまえば、もう乗り物としての役割は終了です。自身の生殖細胞は子どもに受け継がれているからです。あとは、自分の体を食べさせることで少しでも子どもの生存率を高めたほうが有利になるわけです。

さて、このように2つの異なる命を持つ私たち多細胞個体ですが、私たちが「死にたくない」と思っているときにはいったいどちらの命の心配をしているのでしょうか。私は多細胞個体(乗り物)としての命のように思います。私たちが「死にたくない」と思っているのは、個体としての「私」がこの世からいなくなるのが嫌なのであって、「私の生殖細胞」がこの世からいなくなるのが嫌なわけではないでしょう。もし、生殖細胞の方が大事なのであれば、誰か大切な人の個体が死んでしまっても、生殖細胞さえ回収できれば悲しくないはずですが、きつとほとんどの人はそうは思わないでしょう。私たちは間違いなく、乗り物としての個体の命の心配をしています。

これは、増えるもののふるまいとしてはおかしい状況です。なぜなら、先に述べたように私たちが命を大事にするのは、そうすることが増えることに貢献するからです。増えることに貢献する性質しか、次世代には受け継がれないはずですが、しかし、ここでおかしいのは、私たちがもっぱら心配しているのは乗り物の命なのに、増えているのは生殖細胞です。ここには、^Bはつきりしたズレがあります。

このズレを先ほどのハサミムシを例として考えると、ハサミムシの母親が自分の命を大切に、自分の体を子どもに食べさせることをやめて逃げてしまうようなものです。もし、そんな自分を優先するハサミムシが現れたら、子どもは餓えて死んでしまうでしょう。そんなハサミムシは子孫を残せず、絶滅してしまはずです。

人間についても、極端な例でこのズレが明らかになります。たとえば前立腺がんや子宮頸がんなど生殖器にがんができた場合、生殖器ごと摘出しないうちに死んでしまうケースです。多くの人は死んでしまうくらいなら生殖器の摘出をしましょう。私もきつとそうします。それによって生殖細胞が増えることができなくなったとしても、死ぬよりはましだと考えます。これは生殖細胞側からすると想定外です。個体が命を大事にするようになったのは、もともと生殖細胞が増えることに有利だったからなのに、生殖細胞が増えることよりも個体の命を優先するなんて

Y

です。

このようなズレは、おそらく。近年の医療の発展によって生まれた問題だと思います。過去、人間が過ごしてきたほとんどの時代では、個体としての生と生殖細胞としての生はほぼ一致していました。私たち人間は歴史的にはほとんどの時間を狩猟採集によって暮らしていました。狩猟採集社会では、幼少期の死にやすい時期さえ乗り切れば、多くの人は50歳くらいまでは生きられたといわれています。50歳くらいまで生きられるのであれば、個体が生きている期間と生殖可能な期間はほぼ一致しています。つまり個体が長生きすればするほど、生殖細胞ももっと増える可能性が高まります。個体と生殖細胞の利害関係は一致していたわけです。

(b)、現在の平均寿命は(日本の場合)90歳近くにまで伸びました。世界平均でも70歳を超えています。一方で、人間が生殖可能な年齢は女性で50歳くらいまで、男性でも40歳を超えると受精率は下がっていくようです。したがって、人生の後半では、少しずつ個体と生殖細胞との利害関係が一致しなくなってきました。

生殖できない年齢の個体が生きていることは、生殖細胞が増えることには直接的には貢献しません。したがって、自然界ではそういった能力は強化されないはずですが(ただし、子どもの子育てを助けるという役割はあり得ます)、人間の場合、その高い知性を使って技術の力で個体の寿命を伸ばしてしまいました。

その結果、個体の生き残りやすさと生殖細胞の増えやすさとのズレが大きくなってきているように見えます。言い換えると、私たちは増えるものの既定路線から外れつつあるということです。原因は多細胞個体とは生殖細胞の乗り物であったにもかかわらず、多細胞個体の方を大事に思ってしまったという誤解にあります。これが人間の未来に大きな影響を与えるような気がしています。

(出典 市橋伯一著『増えるものたちの進化生物学』ちくまプリマー新書)

問一 傍線部(ア)～(ウ)の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は(ア)

16

、(イ)

17

、(ウ)

18

(配点 各2点)

(ア) ハク|シャ

- ① 友人の家にガイハク|をした。
- ② 彼女はハク|ガクだ。
- ③ ハク|リヨクのある踊りだ。
- ④ 大きなハク|シユで包まれた。
- ⑤ ハク|ネツした競技だった。

(イ) ユウ|ゴウ

- ① ユウ|ガな暮らしぶりだ。
- ② ユウ|キのある発言をした。
- ③ 銀行のユウ|シをうける。
- ④ 支払期限のユウ|ヨを与える。
- ⑤ ユウ|ドウする係になる。

(ウ) ジン|イ

- ① 動物がイ|カクしてきた。
- ② 仕事を助手にイ|ニンする。
- ③ イ|ブツが目に入った。
- ④ イ|ホウ駐車を取り締まる。
- ⑤ サクイ|的に選ばれた人々だ。

問二 本文中の（ a ）、（ b ）に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。解答番号は（ a ） 19 、（ b ） 20

（配点 各2点）

- ① つまり ② しかし ③ 一方 ④ なぜなら ⑤ あるいは

問三 空欄 X に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 21

（配点 4点）

- ① 私の個体の一部は私の子どもの個体の一部となって永遠に繋がっています
② 私の子どもの生殖細胞は私の生殖細胞とは別の細胞となり残っていきます
③ 私の生殖細胞の一部は私の子どもの個体となり引き継がれています
④ 私の生殖細胞は私の子どもの生殖細胞の一部となって生き残っていきます
⑤ 私の子どもの個体の一部は私の個体の一部としてこれからも生き続けます

問四 空欄 Y に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 22

（配点 4点）

- ① 一進一退
② 本末転倒
③ 時代錯誤
④ 前人未踏
⑤ 一心同体

問五 次の一文は、本文中の《1》《5》のどこに入れるのが最も適当か。次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

23

(配点 5点)

生殖細胞が次世代に受け継がれやすくするために、栄養や理想の受精相手を見つける乗り物としてせっせと働いているとみなすことができます。

- ① 《1》 ② 《2》 ③ 《3》 ④ 《4》 ⑤ 《5》

問六 本文の 中の a と e の各文の意味が通るように並べたものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

24

(配点 5点)

- | | | | | |
|---|---|---|---|---|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| e | b | b | a | a |
| | | | | |
| d | e | c | e | c |
| | | | | |
| b | c | d | c | d |
| | | | | |
| c | d | a | d | b |
| | | | | |
| a | a | e | b | e |

問七 傍線部A「私は生殖細胞のほうが生物としての本体だと思います」とあるが、筆者がそのような考える理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。 解答番号は

25

(配点 6点)

- ① 生殖細胞は受精することで適切なタイミングで次世代を生み出すことができるように、多くの機能を個体に提供しており、細菌などの普通の細胞とは異なる性質を持ち、生命誕生以来増え続けてきた特別な細胞であると考えているから。
- ② 生殖細胞の役割は、細胞同士が受精し、次世代を生み出す過程をサポートすることであり、例えば、食べ物を摂取してエネルギーを得たり、異性を見つけて交尾をしたりして、個体の生命維持に直接関与する細胞だと考えているから。
- ③ 生殖細胞は、卵子や精子のように次世代の個体を作り出すための細胞であり、これらの細胞が受精することで新しい個体生まれ、その個体の中に再び生殖細胞が作られることから、次世代の個体を形成する細胞だと考えているから。
- ④ 生殖細胞は、卵子や精子のような細胞を直接生み出すことができる上に、私たちの体の筋肉や骨、臓器などの新しい生殖細胞を形成し続けているように、生きるために必要な様々な機能を果たしている細胞であると考えているから。
- ⑤ 生殖細胞は生命を繋いでいくために、移動したり食べ物を探したりしながら優れた異性を見つけ、精子と卵子の受精によって増殖を繰り返すことで、生命が誕生してから個体の中で最も数が多い細胞になっていると考えているから。

問八 傍線部B「はつきりしたズレがあります」はどのようなことか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

26

(配点 5点)

- ① ハサミムシの母親は自分の体を子どもに食べさせる行動を取るが、実際に残るのはその個体の生殖細胞であるため、個体の生存に関して取る行動と、その個体が増えるために必要な生殖細胞の行動が不一致であること。
- ② ハサミムシの母親が自己犠牲をしてまで子どもの生存を支える行動を取るのは、母性本能からであり、本来はその生殖細胞が増えるには個体が生き残る必要性があるため、個体と生殖細胞の関係としてはズレがあること。
- ③ 生物は個体より生殖細胞を優先する傾向があるため、大切な人が死んで悲しむことができ、進化の途中までは個体の命を重視することが生殖細胞の増殖と直結していたが、感情の発達により生存本能と不一致が生まれたこと。
- ④ 大切な人の個体が死んだ後に、生殖細胞を回収できれば悲しみから逃れられることから、個体の死は生殖細胞にとっては相対的に重要ではなく、生物細胞の命の価値や生存に焦点を当てていることに不一致が生じていること。
- ⑤ ハサミムシの母親が自分の命を最優先にして、自分の体を子どもに食べさせることをやめて逃げてしまった場合、子どもは飢えて絶滅してしまうことから分かるように、個体の寿命と繁殖のスピードにズレが生じること。

問九 傍線部C「近年の医療の発展によって生まれた問題」として合致しないものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。 解答番号は

27

(配点 5点)

- ① 医療の発展により個体の寿命が長くなった反面、生殖できない年齢の個体が生きていることは、生殖細胞の増加という観点から見ると、人間が生殖可能な年齢は人生の後半になるにつれて個体と生殖細胞の利害が一致しない状況が生まれること。
- ② がん治療などで生殖器の摘出が可能となったことで、たとえ生殖能力を失ったとしても生殖細胞の命が延びることが一般的になり、個体の命を優先する医療技術の進展によって、生殖細胞の増加よりも個体の延命が重視されるようになったこと。
- ③ 近年の医療技術の発展により、がん治療などで生殖器ごと摘出して個体の命を優先することが選べるようになった結果、個体の命を長く保つことで生殖細胞ももっと増える可能性が高くなるという両者の利害関係が一致しなくなってきたこと。
- ④ 医療の進展により平均寿命が延び、現在では日本の平均寿命は90歳近く、世界平均でも70歳を超えている一方で、人間の生殖可能期間は限られているため、人生の後半では生殖能力がないにもかかわらず個体が生き続けることになること。
- ⑤ 歴史的には、個体の寿命と生殖期間がほぼ一致していたため、個体が長生きすることは生殖細胞が増えることに直結していたが、医療の進展によって寿命が大幅に延びた結果、個体の長寿が必ずしも生殖細胞の増加に結びつかなくなったこと。

問十 本文の内容について説明した次のA～Eのうち、合致するものはいくつあるか。適切な数を、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は

28

(配点 6点)

A もし、人間が健康に無頓着で将来のことを気にしない性質であったならば、人類は絶滅していた可能性が高く、人類が生き残っているのは、子孫が心配性であったおかげである。

B 筆者は、人間には二種類の命があると考えており、一つは「個体」の命で、寿命があり必ず終わりが来る。もう一つは「生殖細胞」の命で、子孫に受け継がれ、事故や病気がなければ永続する。

C 受精卵は細胞分裂を経て多細胞個体を形成し、その過程で再び生まれた生殖細胞は、個体が生殖可能な年齢になるまで保管され、その後、新たな世代を作り出す役割を担う。

D 筆者は、菌類がキノコを作り、キノコが胞子を広範囲に拡散するための手段になぞらえて、人間も多細胞個体は生殖細胞を増やすための「乗り物」や「道具」として機能していると説明している。

E 筆者は、人間は多細胞個体を生殖細胞の乗り物としていたが、多細胞個体自体を重視するようになり、この誤解が人間の未来に大きな影響を及ぼす可能性があるとして述べている。

- ① 一つ ② 二つ ③ 三つ ④ 四つ ⑤ 五つ

独立行政法人国立病院機構 附属看護（助産）学校
令和7年度 入学者選抜試験問題

国語【解答用紙】

受験校		受験番号		フリガナ	
				氏名	

／ 100

第1問（配点50点）

	問一				
	1	2	3	4	5
解答	5	4	1	2	4
配点	2	2	2	2	2

	問二			問三	
	6	7	8	9	10
解答	4	3	2	2	4
配点	2	2	2	4	4

	問四	問五	問六	問七	問八
	11	12	13	14	15
解答	1	3	3	1	3
配点	4	5	5	6	6

第2問（配点50点）

	問一			問二		問三	問四
	16	17	18	19	20	21	22
解答	4	3	5	5	2	4	2
配点	2	2	2	2	2	4	4

	問五	問六	問七	問八	問九	問十
	23	24	25	26	27	28
解答	5	4	3	1	2	4
配点	5	5	6	5	5	6